

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局

「共に生きる希望の年」に

仙台教区サポートセンター長 平賀 徹夫 司教

「2015年——早いもので、東日本大震災から丸4年を迎えようとしています。皆さま、新年をいかがお過ごしでしょうか。

被災された方々は、少しでも元気や明るさを取り戻されたでしょうか。今、私は、昨年、北は岩手県から南の福島県まで、さらに、幼い子どもさんと共に各地に避難なさっている方々や、お目にかかっているいろいろな話を聞かせていただいた皆さん方のお顔やお話を、改めて思い出しています。



支援にお力添えくださる方々も、思いや気力を新たに、この年をお迎えになられたでしょうか。ご自分たちも被災者でありながら、もっと困っている人を助けなければ、という思いにかられて、仮設住宅に住む方々を定期的に訪問してくださっている小教区のボランティアチームの方々。その方々を助けるために、全国の教会から物心両面で支援してくださっている方々……など。

皆さま方の熱心な祈り、創意工夫、働きに助けていただきながら、心を合わせ、力を合わせてこの1年間をご一緒に過ごすことができました。本当にありがとうございました。

被災という苦難を契機としてですが、私たちがますます一つにつながる、文字通り災いを転じて福となすために、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

この支援活動は、大震災発生から6ヵ月を第一期（緊急避難所期）、その後の1年半を第二期（仮設住宅期）、そして今は第三期（復興住宅への移行期）として行ってきました。「4→6, 45計画」は第一期から継続しているものですが、内陸部（国道4号線沿いの教会）から津波被災地（国道6号、45号沿いの教会）への支援・交流・連帯を推し進める活動の呼びかけです。仙台教区の皆さんはこれによく応えてくださっています。青森県内陸部の教会からは岩手県沿岸北部の地域に出かけ、岩手内陸部からは宮古、釜石、大船渡、気仙沼へ、宮城県はたとえば仙台の教会は石巻、塩釜、亘理等の被災地とつながり、福島県も（CTVCと共に）中通りや会津から原町やいわきへと、支援・交流を深めています。

仙台教区は昨年の4月から「地区制」をとっています。教区の中の教会（小教区）をグループ分けにし、八つの地区に分けました。青森県は西部と東部となりますが、岩手、宮城、福島県のほとんどの地区は内陸部と太平洋沿岸部がつながっています。「4→6, 45計画」による交流・支援・連帯がますます容易となることを期待したいと思います。

あの未曾有の苦しみ、悲しみを経験なさった皆さまが、復興の途上でいまもって味わっておられる苦しみの先に、かすかに見える希望の光を見つめながら、この1年もまたご一緒に希望の年に変えていけたらと心より願っています。

新しい年の初めにあたり、神様からの祝福が皆様の上に豊かに注がれますようにお祈りいたします。

今年もどうぞよろしく願い申し上げます。

今回は、2014年11月に東葛宣教協力体とともに川内村の仮設訪問を行ったカトリック郡山教会、生け花とお茶っこ、一緒に昼食をとるという形のクリスマス会を開いた八木山オリーブの会、そして2012年9月から傾聴活動を行っている「傾聴ボランティアさくら」の支援活動の様子をご報告いただきましたので、ご紹介いたします。

「外に向かう」教会をめざして

川内村仮設住宅 訪問

カトリック郡山教会

平 文敏

11月8日（土）、前回同様秋晴れの中、福島県郡山市の川内村南一丁目仮設住宅において、仮設在住の方々、東葛宣教協力体（豊四季、松戸、亀戸教会）、郡山・二本松教会の人々がともに過ごす時間を持つことができました。

今までも、西千葉・茂原教会とともに同様の活動をしてきましたが、どちらかという受け身の活動でした。今回からは、郡山教会においても仙台教区でも呼びかけられているような「外に向かう」教会をめざし、より主体的に活動しようとする雰囲気が見られるようになってきたと感じています。

朝8時集合、早速、調理にかかりました。東葛宣教協力体からは、豊四季教会の渡邊康男神父様はじめバイタリティあふれる約20名の方々が車に便乗して駆けつけて下さり、一緒に準備しました。炭火を使った焼き鳥、同じく野菜炒め、おしるこ、わかめ卵スープ、おにぎりが手際よく作られました。また、東葛宣教協力体からは、衣料品と水の差し入れも頂き、会場を賑わせておりました。（東葛宣教協力体では、こうした活動資金を計画的に準備なさっているとのこと、たいへん参考になりました。）



さて、待ちかねている仮設の方々は、早くから様子を見に来られたりしていましたが、懇親会の支度も急ピッチで進められました。予定時間の11時には、多くの仮設の方々にお席についていただき、少し早い乾杯となりました。仮設の自治会長さんからは、「ご老人の方が多いので、もしかすると食事が終わると会の意気が下がってしまうかも」という話でしたので少し心配しましたが、会が始まると、東葛宣教協力体からの手品の出し物あり、カラオケありで、長時間にわたり、たいへん楽しい時間を過ごすことができました。

カラオケは、笑いあり涙ありの歌が次から次へとリクエストされました。十八番いっぱいおじいちゃんの歌、意気ぴったり愛情夫婦のデュエット、カラオケが聞こえたからと途中から来られたカラオケ大好きおばあちゃん（90歳ぐらい）の熱唱もありました。教会関係者も元気に歌いました。2時間半ほどがあっという間に経過したような気がします。



懇親会終了後、自治会長さんを囲み、分かち合いを行いました。今回参加した方々からは、ボランティア活動に関する揺れ動く心の動きが多く出されましたが、自治会長さんからは、「こういった活動は、この仮設に住む方々にとってたいへん励みになる」という言葉を頂きました。

避難指示解除準備地域解除後、仮設に残る方々はお年寄りが圧倒的に多くなっており（若い世代との同居が困難）、どうしても気持ちがふさがちになる。そうした方々の力になっているという話でした。

一方、原発事故による後遺症はまだまだ重く、問題点も多いのだということも、改めて実感しました。私たち福島県に住む人々は、決してこの事故を風化させてはいけないのだと思います。そうした意味でも、こうした活動を継続していきたいと考えます。

たくさんの笑顔の花が咲きました

仮設のクリスマスは、生け花とお茶っこ昼食会

八木山オリーブの会

野田 和雄

巨理町旧館仮設住宅の集会場で、恒例のクリスマス会を開きました。

3年目になる今年は、参加者も慣れたもので、この仮設住宅を卒業した人々もやってきます。「久しぶりだね。新居の住み心地は？」こんな挨拶も交わされます。皆が顔見知りだからこそ、引っ越しや新住居のことについての話ばかりが聞こえてきます。

今回はオリーブの会も奮発して、美しい花を増やして皆さんに配ります。花器は場所をとらないマグカップ。お花は、クリスマスを過ぎれば飾りを外してお正月用に変身する優れ物です。仮設住宅のクリスマス会は、毎年の知恵が重なる年末行事となりました。

皆が花を生け終わるころには、集会場は美しく飾られた花・花・花で満たされます。花々に負けない笑顔が広がると、家族と過ごしているような気持ちになります。このメンバーとお花をいけるのもあとわずかと思い、今回は「花バサミ」を配りました。花バサミには、「負けないで」と書いてあります。3年前、草月流の本部から寄贈されたものです。



お花が並んだ机にみかんや美しく包装された「アメ」が配られます。花にみかんとアメの白に加えて、深緑のお抹茶と菓子がふるまわれると、色とりどりの豊かな「なごみ」の時となります。みかんは、愛媛の教会（道後、郡中）、アメと茶菓子は仙台の方からの差し入れです。男性たちもゲームの手を止めて食事の席につくと、花と食べ物の笑顔も手伝い、おしゃべりはさらに盛り上がります。

昼は寿司弁当とお汁粉を食べながら、クリスマスの歌を歌いました。もちろん、昼食代は各自負担で集金します。笑顔と満腹で花に囲まれた楽しい会になりました。

この会は、仮設住宅に残った人と仮設住宅を出たけれど寂しい人が混在している会でもあります。復興住宅の完成とともに仮設集会場の使用許可や制限が設けられ、行政側は住民の自立を目指して呼びかけています。仮設住宅の家賃や光熱費は無料で、ボランティアからの支援もありますが、復興住宅ではすべてが有料になり、一般社会人として扱われます。仮設住宅を卒業するとは、被災者から自立して経済的にも、精神的にも、社会復帰することを意味しています。



自立出来ない人と、自立しても苦しい人の両者を見ながら、私たちは何ができるか話し合っています。八木山オリーブの会は、2015年3月に仮設住宅集会場のグループ訪問を終わり、次のステップを模索していく予定です。

「東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所の事故から3年10カ月」

「傾聴ボランティアさくら」復興支援活動の試み

桜の聖母生涯学習センター 傾聴ボランティアさくら会員 熱海 紀子

「傾聴ボランティアさくら」は、2012年9月に傾聴ボランティアとして5名で活動をはじめました。2012年4月に開講した桜の聖母生涯学習センター主催の「傾聴ボランティア養成講座」（講師 岡安詔子先生）の受講生の中から傾聴の活動をしたいという声が高まり、時を同じくしてある社会福祉法人の施設から傾聴ボランティアの要請を受けました。この施設は、2011年4月1日開所を前にして、東日本大震災における津波被害を受けた福島県浜通りの施設入所者の方々を急遽受け入れていました。

要請を受け、直ちに2012年9月に活動をはじめました。これが、「傾聴ボランティアさくら」の出発点となりました。その後、傾聴ボランティア養成講座はさらに第2期から第5期へと進みましたが、2014年1月第4期養成講座終了後、同年4月総会を開催し、会員84名で正式に「傾聴ボランティアさくら」として発足いたしました。その後も第5期傾聴ボランティア養成講座を開講し、2015年1月に第5期アフターケアコースが終了いたします。

傾聴の動機と活動内容

福島は3年10か月前の2011年3月11日、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故によって筆舌に尽くすことができない体験をしました。大きな揺れの恐怖、断水、停電、ガソリンの不足、交通手段の停止、そして流通は滞り食料品が店頭から姿を消し、放射能の情報がないまま生活は混乱しました。不安と戸惑いと怒りを募らせる日々でした。



養成講座での
ロールプレイングの様子

大きな喪失体験をされた方々が、浜通りから福島市にも避難して来られました。一方、子育て中の親御さんは、危機感や見通しの立たない将来への不安、情報への不信感に生きる力が萎えるのを持ちこたえていました。しかし、どこに行ってもお互いが温かく親切でした。高齢者に順番を譲り、水を分け合い、声をかけあっていました。

このような状況下で、「悲嘆を抱え、一変してしまった生活からどうしたら立ち上がることができるのか」「福島の地が、一步踏み出す力をつけるために何ができるか」という思いにかきたてられました。

桜の聖母生涯学習センターの福島復興支援の「傾聴ボランティア養成講座」を知ったのは、このようなときです。受講生の方々はご自分も被災者であるにも関わらず「なにか人の役にたいたい」という一心でご自分の仕事を持ちながらも時間を工面して講座に駆けつけました。

第1期養成講座終了後、すでに始まっていた社会福祉法人「なごみ」、医療法人「生愛会」の「傾聴ボランティア」に加えて、新たに高齢者総合休養村「あづまの郷」、デイケアホーム「ツクイ」、グループホーム「もとうち」、そしてカトリック松木町教会の愛の支援グループ「ふれあい茶の湯」・「浪江町・宮代仮設住宅」訪問に参加させていただいたことは大きな喜びでした。

傾聴と戸惑い

いざ傾聴ボランティアを始めると、戸惑いが生じてきました。「これで傾聴になっているのか」「ことばの使い方、複数の方と同時の対応、話のきっかけはどのように、話題や関心の捉え方はこれでいいのか」「生涯にわたって築いた家や家族を失い、仕事を失い、生きがいを失って悲嘆の中にある方にどのように寄り添うのか」と。無力感に陥ってしまうことや、話のきっかけを見つけられず、何も出来ない空虚さに陥ることもありました。しかし、これらの経験から、「話かけができるようになるためには、かなりの期間と地道に関わりを続けることが重要である」ということに気づきました。

傾聴ボランティアの現実の中から浮かび上がってくる課題もありましたが、そこから解決法にも気づかせていただきました。

傾聴と喜び

はじめは話すことを躊躇しておられたAさんから「あなたたちが来てくれたから話せるようになったよ」というお言葉をいただいたと分かち合ってくれた聴き手の顔は、輝いていました。頂いたお言葉は私たちのこの上ない喜びでした。傾聴ボランティアを続ける支えとなりました。

また、別の分かち合いでは、「話し手の方が話を続けてゆくうちにお顔がだんだん丸くなってこられたの」と喜びを分かち合ってくれました。寡黙な女性Bさんは、詩吟の本を持っていたので、詩吟の得意な聴き手が静かに吟じ始めると、Bさんは次第に声を合わせていました。それまで強ばっていた表情は、次第に和らいできたのです。



傾聴の様子

一期一会であっても、このお一人の方との出会いに、一人ひとりの方を慈しまれる神様のみ手を感じるのです。そしてその出会いから私たちの方が関わりの喜びといのちの力を頂いています。

ある仮設住宅を訪問した時でした。数名でテーブルを囲み、初めはよもやま話してから次第に津波が襲ってきたときのことを話してくださいました。Cさんは「津波から船を守ることはできたが……」と、言葉少なに言われ、心に深い痛みを抱えておられるのを感じ、「彼を癒してください」と祈らずにはいられませんでした。ご夫婦で来られた方は、避難先で、お二人がやっと再会できたときのことを話してくださいました。「主人の髭は伸び放題、あまりの苦惱でやつれた姿に驚いた」と声を詰まらせて語られました。「今はやっと健康を取り戻すことができた」と、話されたときの奥様の表情は明るく、喜びが伝わってきました。

傾聴は簡単ではありませんが、話し終わった後の話し手の方の表情から「傾聴」の力強さを感じます。同時に「傾聴」は、自分を映す鏡だと気づきました。自分と向き合い成長を促されているのを聴き手の誰もが感じていました。

今後の展望

私たちは、人との出会いによって希望を見出し、立ち上がることができることを学びました。今はどのような状態にあっても、その方のいのちを両手で押し頂く心で関わり、その方のいのちが瞬間でも輝き、生きる力を取り戻すことができるように寄り添い続けることができればこの上ない喜びです。

傾聴ボランティアを継続するため、仲間の支えやフォローアップ、そして何よりも場数を踏む必要を感じています。それと同時に、傾聴ボランティア・アフターケア研修(事例研修)も継続し、「常設傾聴さくらコーナー」で、傾聴活動を振り返り、語り合い、分かち合うことを通して学びあい、地道に活動を続けていきたいと考えています。そして、傾聴を通して話し手の方の心に「いのちのよろこび」の火を燈してくださる神様の力に信頼し、私たちを導いてくださるように祈り続けたいと思います。



アフターケア研修中の傾聴ボランティアたち

【ボランティア募集中】

毎年冬場は、ボランティアが激減しております。活動人員不足により、被災地のニーズにお応えできないことがある状況です。

仮設住宅のお茶っこなど被災地での支援活動は、季節を問わず日々行っております。

皆様のご協力をお待ちしております。どうぞよろしく願いいたします。

◎お申し込み方法などは、カリタスジャパンブログ (<http://caritasjapan.jugem.jp/>) や、各ベースのブログやホームページなどをご覧ください。